



花 信

Kashin : The Shinshu University Library Bulletin

第13号 2003. 3

目 次

図書館雑感	1	お知らせ	13
小谷コレクション	2	(企画図書展)	13
「多湖文庫」とは何か	3	(本学関係者著作寄贈図書一覧)	14
平成14年度後期授業「情報の収集と活用」	5	(所蔵絵画展)	16
利用者の声から	11	(行 事 等)	16
分館だより (工学部分館)	12		

図書館雑感

農学部分館長 廣 田 満

昨年図書館に電子ジャーナルと文献検索システムの SciFinder が導入された。研究の点から考えるとこれは画期的なことであり、いよいよ信州大学も他の大学に伍する研究環境が整いつつある感じがする。ところで、電子化された資料あるいはデータベースは実際には図書館がなく、それぞれの資料の提供元に備蓄されている。この点では図書館は空洞化するという意見もあるが、すべての資料が電子化されるわけではない。また、信州大学図書館としての学術資料の収集を行わねばならない。図書館は従来の仕事に加え、新しい仕事で、ますます忙しくなるのではないかと考える。

例えば図書館としてどのようにソフト面でのサービスを提供できるかということを考えねばならない。研究の支えとなる情報の提供という点で図書館の果たす役割は重要である。電子ジャーナルの内容の充実や利用促進という面から、教職員あるいは大学院生に対する電子媒体に対する講習会や使用相談など学内のリテラシーの向上をはかる必要がある。

図書館は多量の資料を蓄え、学術資料の確保流通を円滑に行うだけでなく、教科書、参考書など教育資料を整備し、学生にとって利用しやすい学習環境を整えることも重要である。

最近、学生に専門の勉強をするだけでなく小説や新書などいろいろな分野の本を読めば、知識が広がり、アイデアも出てくるという話をしたことがある。大学生活も勉強の他に携帯電話、メール、いろいろな遊びがありすぎて、本を読む楽しみを知らない学生が増えている。本を読むにしても、時の話題の本を読むとか、友達と会話をするため、断片的な知識を得るため読書をする。それも本一冊を読みきらないで必要な部分のみを飛ばし読みする。興味をもったものをとことん読みこむという面白さを知らない学生が増えている。

このような学生諸君を如何に図書館に引きつけ、研究に図書館を利用できるまでに導けるのか。ただ教科書、専門書をそろえ、静かで明るい空間を準備するだけではなかなか難しいと思う。もちろん教育方法にも工夫が必要であろうが、図書館としても何か一工夫しなければならない時代になっている。

私が大学生の時、よく通った喫茶店があった。そこには広い木製の重厚なテーブル、それを取り囲んで長いすがならべてあった。コーヒーを飲みながら、一人で本を読む人、研究室のゼミらしく数人でトース

トをほおぼりながら、議論をする人たち、静かではないが騒がしくもない、落ち着いた微妙な空間があった。図書館にも何かこの喫茶店のような自由に飲物や本を持ち込め、議論や小人数のゼミができる空間があってもいいのではと思う。農学部分館の入り口にあるロビーもこれに近い形で使われているが、もう少し快適でアカデミックな環境を整えられればと願っている。

図書館は大学の知の象徴であり、書庫には蓄積された人の知識が蓄えられている。この静かなイメージの図書館が、動的な役割を担っていることは意外と外からは知られていない。図書館からの学内外に向かっている活発なアクションを望んでいる。

●●○

○●●

小谷コレクション

高石道明

はじめに

「信州大学山岳科学総合研究所」が昨年4月に発足した。アルプスをはじめ四方を秀麗な山に囲まれ、四季折々にそれらを仰ぎつつ、裾野の里山・里地で豊かな産業と文化を育んできた信州の地に最もふさわしい研究組織が出来た。日本人の文化の大きい源である山とその裾野における自然と人間のかかわりは時代とともに変貌をとげつつある。幸い最近では、山岳観光の見直しや里山再生などに関心を持つ人が増えてきている。信州大学の人文・社会・自然科学の総力を上げて、山の自然と人との関係について、21世紀の新しいパラダイムを提示しようというのが研究所の設立目的である。

これに先立つこと半年前の平成13年10月に、「山岳科学フォーラム」を開催し、研究所が取り組むべき具体的研究課題をたくさん提示してもらったが、講演をお願いした梅棹忠夫先生からは、研究所にはそのコアになる書籍コレクションが必要であるとの提言をいただき、京都にある個人コレクションを紹介していただいた。それが話の始まりであった。

小谷コレクションの成立

京都の老舗(株)イセトー会長である小谷隆一氏は、京都市立第二商業学校から旧制松本高等学校に学び、東京大学法学部を1950年に卒業後、家業を継がれた。商業学校時代に山に導かれ、そのために松高入学が生涯で最もうれしいことだったとおっしゃる。日本青年会議所会頭、京都経済同友会代表幹事、府公安委員長など社会の要職をも歴任しつつ、山との付き合いも続けられた。中でも1965年に、京都府山岳連盟カラコルム・ヒマラヤ登山隊長として処女峰ディラン・ピークに挑戦した遠征は、医師として同行した松高1年後輩の北杜夫が書いた小説「白きたおやかな峰」で有名になった。小説で小滝隊長となっているのが小谷氏である。

1974年、貴重な山岳書のコレクションを一括して譲りたいとの話が、所有者の故・小林義正氏(丸善役員、「山と書物」正統2編の著者)から入り、小林氏はどこか公的な機関にでもと考えておられたようだが、小谷氏が個人で引き受けることとなった。氏はご自身の少なからざる蔵書と合わせてこれを整理・保管するだけでなく、新たに収集すべき本のリストをまず作り、それを目標にコレクションの充実に努めてこられた。その結果、「関連する書物がこれほど多いスポーツは他にないと思う(小谷氏談)」登山と山に関する8千冊に及ぶ稀有なコレクションが出来上がった。

コレクションの特色

筆者は山の本については素人なので、ここに書くことが十分に正確なものだと保障することは出来ないが、小谷会長を2002年1月に初めて京都にお訪ねし、最初の交渉を行って以来何度もお会いし、また1988年10月に京都国体の際、コレクションから小谷氏自身が選んで「山岳名著100選展」を開催したその解説書などをいただいていたので、それらの情報を参考にして、少し紹介してみる。

まず、山岳関連の書物コレクションとしては、他に「深田コレクション」と「諏訪多コレクション」などが現存するが、小谷コレクションはそれらを凌駕する質と量であるらしい。

このコレクションには、内外の初版本が多い。谷文晁「名山図譜」、志賀重昂「日本風景論」(これは15冊の異版すべてがそろっている)、ウェストン「The Japanese Alps」などなど。洋書の中には英文でアルプス氷河を最初に報告したものであろうと思われる1744年出版のものもある。

また、小谷氏によれば、山の本には愛蔵版、豪華本、限定本が多いそうだが、11部しか発行されていない小林義正「山と書物(愛蔵版正・続)」の正のほうなどを代表に、装丁にも意匠を凝らしたものが多い。

このように、現在ではいくら払っても入手できないものを多数含む極めて貴重なコレクションであり、今後は附属図書館の特別資料室で展示・閲覧に供するため、分類整理作業に入り、今秋には公開される予定である。山岳科学総合研究所と共に本学の研究・教育に十分活用すると共に、一層の充実に努めたい。

(信州大学山岳科学総合研究所運営委員長、留学生センター教授)



森本学長から感謝状を贈呈(記者発表会場において)

〇●〇

〇●〇

「多湖文庫」とは何か

山本英二

日本の江戸時代の歴史を研究している私は、仕事柄、日本全国の大学図書館を訪ね歩き、所蔵されている古文書や和漢籍を見せていただくことが多い。そうして訪れる各地の図書館には、どの館にも、それぞれの館の特徴なり個性を示す貴重な書物類が大事に保存されている。例を挙げると、東京大学の南葵文庫や東北大学の狩野文庫などは、そうした特別文庫の白眉である。

では信州大学にも、そうした特別文庫はないのだろうか。附属図書館中央館を三階に上ると、右手すぐに特別資料室がある。もとはギャラリーとして使われていたスペースだが、最近の改装で、特別資料室になったばかりである。じつはここに信州大学が所蔵する貴重な古文書や和漢籍が保存されている。

といってもそれぞれの史料が所蔵されるまでの経緯は複雑である。ごく大雑把に言えば、信州大学の前身である旧制松本高等学校、旧制松本女子師範学校の郷土資料、それに長野県寄贈本にほぼ分類できる。

そのうち今回紹介するのは、「松本女子師範学校郷土資料・多湖文庫」である。

多湖文庫は、昔から教育県として全国に名を馳せている信州において、地域に根ざした高等教育を展開してきた歴史を物語る和漢書および近世古文書である。名称にある「多湖」とは、松本藩戸田家の家臣で、代々松本藩の藩校崇教館の教授を勤めた「多湖」家に由来する。この「多湖文庫」は、同家歴代当主が収集・編纂した和漢書や松本藩の出版物、同家伝来の漢籍稿本および未定稿、往復書簡類などから構成されている。なお稿本類と書簡は、附属図書館教育学部分館でほこりをかぶっていたものを、1998年に当時の浜崎情報課長と中央大学の鈴木俊幸さんにより見いだされ、中央館へと移管したものである。さらに私は、昨年、藤沢市文書館に寄託されながら、近年寄託解除の後、所在が不明となっていた金沢甚衛旧蔵「多湖安元日記・古文書」23点を、科研費で購入した。これにより、多湖文庫は、従来からの和漢籍・未定稿本類・書簡類に加えて、日記と古文書が含まれることになり、ほぼ文庫の全貌が判明することとなった。

多湖文庫の特徴は、藩主の戸田家が、信州松本へ転封する以前の17世紀半ばの美濃国加納藩主時代からはじまり、19世紀末にいたるまでの歴代当主の史料が、原本のみならず推敲本、メモ書きに至るまで、ほぼ欠けることなく保存されているところにある。このような近世における地方の儒学者の史料が、大量に、しかも江戸時代の保存状態の原型をとどめたまま残存していること自体、めずらしい。

そこで私は、中央大学・鈴木俊幸さんをはじめとする日本近世文学研究者の手を借りて、1998年以来、信州大学附属図書館（中央館）所蔵の旧制松本高校旧蔵・松本女子師範学校郷土資料等の和漢書および古文書の整理を年数回にわたってボランティアでおこなってきた。現在はようやく目録作成のための書誌データができあがったところである。そのなかには松本藩の藩校である崇教館が作った木活字本「尚書正文」や「崇教館学則」のような珍しいものもある（写真参照）。なおデータの一部は、書誌情報をHTML形式に変換して、信州大学附属図書館のホームページ上に「松本女子師範学校郷土資料・多湖文書データベース（実験版）」として公開し、また原本の一部を画像データとして蓄積し、目録データとのリンク付けをおこない、試験的にインターネット上に公開されている。

(<http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/eddb/>)

(信州大学人文学部人間情報学科助教授)



尚書正文



崇教館学則

報告：平成14年度後期授業「情報の収集と活用」

〈担当：人文学部 中嶋助教授〉

金井忠彦

信州大学附属図書館では、平成9年度から主に全学の1年次生を対象とした標記授業への組織的な協力を行っている。情報リテラシ関連の授業の一部を教官と交代した形で担当している大学図書館は数多くあるが、全面的に参加している大学は今のところ少ない。以下に授業用テキスト作成の目標や授業参加の状況を報告し、さらに今後の授業内容への提案など若干個人的意見も付記して、本学図書館の教育支援サービスに関する現状の一端を概略的にお知らせします。

1 信州情報研究会発足と出版

(1) 研究会の発足

平成13年秋頃長野県内に広く呼びかけ、最近必要とされる情報リテラシにも対応した情報や文献の収集と活用などに関する本の出版を目的とした研究会を発足した。最初に、本学授業で使用するテキストを作成する。作成したテキストにより本学の授業を行い、そのフィードバックにより内容を更新する。さらに、それらにより県内外の各図書館等において授業やガイダンスなどを行うことで、地域貢献に繋げることが目標である。今回、残念ながら公共図書館からの参加はなかったが、県内の大学や短大図書館職員などからは多数参加があり、分担執筆してテキストを作成した。

(2) テキストの目標

テキストは最終的には出版を目指すということで、類書にない特徴をどのように出すかなどについて、研究会の集会を重ね様々に検討を行った。その結果、内容的に長澤雅男「情報と文献の探索」第3版(丸善)を参考とすることになった。しかし、この本は図書館職員向けである。新たに出版を図る本の読者及び利用対象は図書館職員ではなく一般社会人や大学生(1年生及び短大生など)であるため、次のような特徴を盛り込むことを目指した。

① 情報環境の変化への対応

急速に進展しているインターネットやデータベースなど電子(体)情報の探索などに内容的に半分くらい割り、電子体あるいは冊子体のどちらにも比重が偏らないことにした。全体的にこれからの時代に誰でもが必要とするスキル内容とし、電子体と冊子体両方の情報や資料に関する新たな情報リテラシ必読書を目標とした。

② 多様な環境などへの対応

従来、大学では一般的常識的な知識については対象としてこなかった。大学を取り巻く環境は激変しており、予備校で一般常識を教える時代となっている。分業化が進展した今日、人々の共通的な知識や認識は極端な格差を生じている。職業・職種や僅かな年齢差の違いにより、互いに理解しがたい状況が増していると多くの人が感じている。また、多様化した価値観あるいは人生観などを肯定する社会的意識や環境も進展しており、逆に人々の相互理解や共通的な認識などを難しくしている。これ

らの較差が、社会の混迷化と世界の危機的な状況を招いている一因となっていると推測される。大学がこのような社会と世界の現状に無関係で存立することはできない。しかし、大学においては単なる一般常識ではなく、大学卒業生あるいは社会人として誰でもが知っているべき共通知識的な概念を基本対象としたい。このため、例題や練習問題はそのような諸概念を、学生等が興味を持てる切り口であるいは知らないと思われる面から、できるだけ網羅的に考慮する。共通知識的な概念は、単に高校などの教科書風に取り上げてても効果は少ない。しかし、高校教育までに対象となっている概念でも必要な内容は対象としなければならない。その成立した時代背景とともに、現代の社会や自分自身の生活とのかかわりや課題、さらには将来的な問題点など種々の観点から取り上げることを目指す。

③ 練習問題とレポート提出

数千年も前から単に教えられるだけでは、理解しにくいだけでなく自分自身の知識とすることは難しいあるいは不可能といわれている。自ら思考して探索すること、さらにレポートで文章にすることにより、いくらかでもそれらの増進に繋げたいのがテキスト（授業）の目的の一つである。

④ 理解し易さへの配慮

各章に参考的な知識や情報を、参考知識あるいはコラムとして掲載する。また、掲載する参考資料は、誰でもが知っているべきものを厳選して各章20冊程度とする。

⑤ 冊子体も含め検索に必須な二・三・四次元的思考の増と実践を目指す

検索対象概念に対応する用語は同義語などもあるため、その検討には二次元的思考が必要である。ヒットしないあるいはヒット件数が多すぎる場合、その上位的あるいは下位的な概念の考察に三次元的思考、さらには対象概念に対する時間的・歴史的な四次元的思考も必要とされる。

また、一般的に抽象的概念が先行し具体的内容を伴わないことが多いと指摘されている。このため、できるだけ抽象的概念と具象的概念の同時取得を目標とする。

(3) 出版への課題

現在作られたばかりのテキストが、上記の目標を十分に達成していないことは明らかである。また、新たな情報源などに対応し、テキストは今後改善・改訂してゆく予定である。

なお、このテキストが出版された場合、利用対象は一般社会人も想定している。一般的に図書館では、図書を大学生あるいは一般向きなど利用者対象別のほか、娯乐的・教養的・専門的内容に大別し選書の際の参考とする。それぞれはさらに分類されるが、実際には娯乐的または専門的な内容と教養的なものとの境界、あるいは両方が含まれるようなものも多い。通常、公共図書館では教養的なものを蔵書構成の中心として目差すことになり、大学図書館では専門的内容が大きな比重を占めることになる。数年前、本学図書館の資料選定基準を検討した際、ある委員から教養図書とは具体的にどのようなものを指すのかという詰問をされた。出版を目指すこの本は、娯乐的あるいは専門的な図書ではないので教養図書となるが、大学生のテキストにも使用することになるため若干専門基礎的な内容も含まれるともいえる。

これらの目的や特徴などにそったテキスト（出版物）として、次のような題名（概要）が考えられる。

日本人（大学生）として誰でもが知っているべき必須概念を、自ら探索して収集・修得し活用する

スキルと方法 — 情報リテラシ入門 —

2 授業及び配布テキストなど

(1) 授業方法

授業は例年中嶋先生を中心に、信州大学附属図書館職員が援助する形態で行ってきたが、今年は授業をフィードバックして執筆した箇所に反映させ出版を目指す目的で、学外のテキスト執筆者にも参加していただいた。また、信州情報研究会参加者の方々には、テキストの作成だけでなく授業レジュメ原案なども作成願った。このため、例年の授業に増して、内容の濃いものになったと実感された。また、授業場所として図書館だけでなく、半分近くは松本キャンパス総合情報処理センターを利用させてもらっている。

なお、一昨年までは50名程度の受講生がいたが、今年度は受講生20名弱の状況となった。毎週5問のレポート提出が課せられることから敬遠されたと推測されるが、大学に入学して半年たつと学生の多くは大学の授業に失望してしまうといわれる最近の実態などが、影響を及ぼしているかもしれない。

大学の学習は自ら勉強することが基本であるが、この授業では毎週レポート作成に概ね5～10時間は必要であろう。ある受講生に「レポート作成がこの授業だけならたいしたことはないが、ほかも併せると全部で5科目もあるので大変。」といわれた。これはまさにそのとおりであろう。授業の内容や形態などから、学生一人一人に即した授業の選択などを含めた総合的な学習（修学）援助が、どのようになされているのであろうか！ なお、授業やテキストに対して受講生全員に評価アンケートを提出してもらっているが、具体的な意見は少ない。

(2) 受講生の理解

授業支援を行った側としては、「インターネットを概ねクリックだけで利用することと種々のデータベースを検索することとは基本的に異なる」ことが実感された。そのあいだにはかなりの隔りがある。また、提出されたレポートから、受講生にも大きな差がある。練習問題で使われている用語をそのまま検索語さらにはキーワードとし、検索できなかつたと記してきた受講生のレポートも最初のうちはかなり多かった。（簡単に検索できる練習問題を中心としたが、問題で使用している用語をそのまま検索語としても結果がでにくいような練習問題も入れた。）データベース検索の基本は対象主題などの概念把握と分析であるが、最近では全文検索エンジンが多くなり必ずしもそのような思考をしなくても検索が可能となっている。しかし、検索結果からの再検索的思考が身に付かなければ、この授業を受けた効果は半減する。一般的に、修得しようとする内容概念を自ら分析し発展・深化させることは正統的な学習の基本とされる。

授業の進行と途中での補足的説明などにより、検索スキルや結果の評価などは全体として明らかにアップしたと思われる。基礎編で、「21世紀は知識の時代となるといわれており、P. F.ドラッカーはそのような時代において知識型労働者は50%を越えると予測している。知識型労働者に必須なことは、日進月歩で変化し増大する知識概念を自ら獲得していくことである。」と触れた。提出されたレポートをみると、「ごまかし学習」の影響か、あるいは成長期に自然に獲得されると信じられてきた二・三・四次元的思考などに、若干較差があるのではないかと感じられた。なお、検索の基礎となる二・三・四次元的思考について、応用編授業の最後に確認したところ、学生はその概念を明確に把握していないようにも思われた。（上位・下位などの概念分析やその思考過程が検索の中心であり、検索技術は周辺的なものであるが）

(3) 情報リテラシ教育の目標

情報アクセスへの環境変化は近年著しい。それは当初、(大学)図書館の利用者援助や利用者ガイダンス内容の変化として生じた。さらに最近日本において、単に文献やリソースの使い方を教える(ハウツー)だけでなく、本学のような学生(社会人)教育として、利用者の生涯に生かされる情報活動全般的な教育が始まったところである。なお、必須科目として対応しようとしている大学もでてきている。既に米国大学においては、図書館の利用者教育だけに止まらない、次のような情報リテラシ教育が大学教育の一部として位置づけられている。

- ① 学術情報がどのように作られるかを理解する。
- ② 情報にはどのような種類があるかを知る。
- ③ 自ら情報ニーズを把握して、必要な情報に効果的にアクセスする。
- ④ 入手した情報を批判的に評価し活用する。

米国大学研究図書館協会はこの充実のため、2000年に「高等教育のための情報リテラシ能力基準」を具体的に定め、2001年には「情報リテラシ教育のための目標」を提示している。しかし、大学教育の一環としての情報リテラシ教育は米国においても始まったところであり、スキルの獲得に関する効果的な教育がいくつか報告されている状況である。(本学の授業「情報の収集と活用」もこの米国大学研究図書館協会の基準を踏まえてはいるが、今後さらに試行錯誤的な再検討が必要であることはいままでもない。)

なお、テキスト基礎編の最後に次の文章を記した。

「基礎編各章に記した基本的知識は情報リテラシに関して限定的な内容であるが、それを知っているだけではそれ程意味がなく殆ど役に立たない。しかし、多くの検索システムは利用方法をヘルプなどとして用意しており、その内容を理解する手助けにはなる。ネットワークやデータベースなどの知識や利用方法は、特に日進月歩で変化している。また一般的に、知識はある仮定のもとに成り立っており、過去から現在にいたるあらゆる知識に対する基本的姿勢として、何らの批判的考慮もなく受け入れることは効果がない。それらを利用すること、すなわち応用と活用が本書の目的でありⅡ部以降でその実践練習を行う。」

3 今後への展望

(1) 授業内容と情報リテラシ

様々な要因から子どもの「やる気」が減少しており、各所でその対策的な取り組みがなされている。このテキスト(授業)では、現代に生きる社会人やこれから社会に出る大学生などにとって必須と考えられる、共通的な知識や一般常識的な概念を網羅的にかつ自らも獲得できるようにすることを第一に目指している。しかし一般的に、常識的な知識の習得に対しては、興味が薄くなりがちである。特に、大学に入るまでに十年以上も勉強してきた学生にとって、大学は専門的な職業に直結する学問の教授場所としての期待があろう。高校までの勉強内容は、概ね過去数千年から数十年にわたり人類が獲得してきた歴史的な極めて基礎的な知識が中心である。子どもたちにとって、現在及び将来の実生活や実際の職業に役立つあるいは必要であると実感できる知識内容は少ない。一方近年、各専門分野の最先端的知識の修得は、概ね大学院などが対応しつつある。現在の大学教育の内容は学問体系の基礎的あるいは部分的なものを中心とならざるをえないため、大学生にとっても、将来のあるいは近くに迫った経済的活動(労働生活)には中途半端に感じられるかもしれない。「大学に入学して半年たつと学生の多くは大学の授業に失望してしまう」といわれているが、原因の一つはこの辺にあると思われる。

学生が興味を起すよう授業の最初に、「現在1%にも満たない知識型労働者が、21世紀には50%を

越えると予測されているが、これはあくまで予測である。また、職業に貴賤はないので、知識型労働者が偉いということでもなく職業選択は個人の自由である。しかしマクロ的には、日本が先進国の平均を超えていなければ、現在の国債評価（日本の近い将来は中流国であると、外国から評価されている。）と同様、日本経済全体としての実態も同じ（現実）になることは間違いないであろう」と説明した。これは、信州大学の卒業生の多くに知識型労働者になってほしい、あるいはなることができる能力を獲得してほしいという願望を込めたものである。

(2) 情報リテラシ授業への一提案と課題

21世紀における知識型労働者の職業や職種は、多種多様となると予測されている。この授業を発展させ、単に共通的な知識や一般常識的な概念の修得だけでなく、例題や練習問題に様々な職業や職種に必要な知識や概念を織り交ぜて、大学として学生になってほしいあるいは就職（起業）希望の学生が望む職業や職種別の種々のコースを開講し、学生に選択できるようにすることも方策の一つであろう。僅かな図書館職員だけでは多数の学生に対応できないが、e-Learning や TA などの利活用により実現可能と思われる。様々な職業や職種に必要な知識や概念は、企業や組織などからの協力や検証なども必要である。図書館でタッチする具体的内容（案）としては、e-Learning などへの作成支援、TA への教育さらには企業や組織などとのコンタクトによるテキストへの反映等が考えられる。種々の企業や組織などで必要とされる概念の e-Learning 教材やテキストへの反映は、例題や練習問題だけでなく、様々な組織（職種）で働く人々の生の声も参考知識やコラム等に掲載することができれば効果があろう。なお、平成15年度より附属図書館に研究開発室が設置され（館内措置：平成14年12月16日開催の学術情報・図書館委員会で承認）、e-Learning 開発などはそこの当面の主要業務となる予定である。

最近の就職状況の悪さゆえ、2年次から就職活動を行う有効性がいわれている。その理由は、大学生生活の早い段階で企業などが望む人材（内容）を知ることにより、それを認識して必要な修得を自ら行うことにあろう。既に、企業留学的な制度も実施され効果を上げている。大学1年次からこのような授業がなされれば、就業に結びついた目的意識が学生の学習活動にいくらかは有効と考えられる。学生の「やる気」や本学進学希望者の増加も期待できるかもしれない。入学生の多くが一年次からの専門教育を望むことから、それが可能なようにカリキュラムなどが変更された。専門的教育だけでなく、大学1年次から就職あるいは就業活動に関連するような授業も、より必要とされる時代になっているとも思われる。（テーマの例 ○○○ を目指す人のための「情報の収集と活用」）

予備校で一般常識を教えるような現状から、教養的な教育の必要性も指摘されている。共通的な知識や一般常識的な概念の修得は、単に教えられて勉強するのではなく練習問題を自ら探索することでいくらかは効果があろう。しかし、自ら探索したとしても興味のない概念の修得は容易ではないが、各人が志望する分野に必要な知識となれば若干の効果も期待できる。なお、現在行っている授業の受講生は、新入生の1%にも満たないのが実態である。現状では個人単位でレポート提出を課しているだけであるが、グループでの作成や発表なども織り交ぜて、いわゆる「ごまかし学習」からいかに脱却を図るかも今後の課題とされる。

4 大学及び教育

大学にとって、地域貢献や産業活動への協力などを含む研究は最も重要であろう。しかし、「高度職業人の育成」を掲げた本学の目標からも、研究と同じ以上に教育も重要と考えられる。また、研究者も学校教育を受けて育てられる。一方、従来そして現在も、学生教育に対する多くの大学（学部）の対応は研究に比して基本的に差がある。その大きな理由は、教育が教官の業績に反映しにくいことにある。教育評価自体については種々研究されているが、実際に教育を担当する教官の業績にはあまり反映され

ないように見える。また、学生個人に対して、高度職業人の育成という目標を具体的に実現できるような教育内容や方法への対応も若干明確ではないように感じられる。

大学教育の改善や向上などについては、教養部の設置と改廃にみられるように過去から様々な制度的な改善がなされてきた。また、カリキュラムの継続的な見直しや授業評価もなされるようになった。しかし、先行独立法人に指摘されるように、大学において組織やカリキュラムの改革だけではその効果が幾分疑問視される。「日本の多くの大学や学会における研究は、個々に細分化された学問体系をいわゆる蜻蛉的に別々に構築してきた」と丸山真男氏は50年近く前に指摘された。近年多くの専門分野においても資料電子化などによる影響やその効果はすさまじいほどであるが、未だそのような側面があることは否定できない。研究だけでなく大学教育も、学生個人への総合的な教育や日本全体の教育に有機的効果的には結びついていないようにも見える。従来、教育は文部科学省がその中心といえたが、歳出並びに公務員削減などを求める社会情勢や文部科学省自身もいままでと同じ方式では大学の研究・教育の将来と発展にその限界を感じていると推測される(文部科学大臣が「明日の社会は分からない」といっている現状から)。このため、これからの大学教育については大学自身が中心となることが求められており、大学教育は幼稚園から生涯教育までの頂点にあるという、幻想ともいえるその実質化を目指すことが必要となっていると感じられる。

かつて大学は、社会や世俗的なものから超然としていることがその存在理由の一つとされた。現在においてもその必要性は減少していないが、産業や実社会に役立つ研究がより求められている。また、社会や様々な組織が必要とする人材の提供についても、その期待に十分には応えていないように思われる。例えば近年、多くの組織においてシステム的な思考と知識が職員に必要とされて久しいが、大学教育として必修になっていないところが多い。しかし、大学の使命は、単に社会が期待する研究や教育だけでは不十分である。大学からの知識や情報発信には、社会に対して様々な問いかけあるいは提示しさらにリードするような相互的作用が、当然のことであろうが期待されている。

◎ テキストで取り上げた事項(概念)の例

◦ 総記関係

戦争とテロ、環境問題、ターミノロジー、フラクタル ほか

◦ 哲学・論理学・倫理学関係

20世紀の代表的な哲学といわれる現象学、エポケー、有機体論的全体論、排中律 ほか

◦ 宗教関係

根本仏教と大乘仏教、カトリック教会の列聖と列福、キリスト教の分派と教派 ほか

◦ 社会科学関係

法令と通達、経営戦略と戦略経営、第二地銀の危険債権、引当金(利益留保性・負債性)、広告宣伝(POP)、ビジネスモデル特許、登校拒否、教育(江戸時代以前の日本に存在したカレッジやローマ字など) ほか

◦ 文学関係

ギリシャ文学及びギリシャ神話、寓話、日本の伝承民話と最初のヨーロッパ翻訳文学、ルネッサンス ほか

(情報管理課 図書館専門員)

◆◆ 利用者の声から（医学部分館） ◆◆

Q あるテーマについて、どんな文献があるか知りたいのですが、検索の方法を教えてください？

A 無料で使える文献検索にはいくつかありますが（花信12号2頁参照）、医学部分館では、PubMedや医学中央雑誌を使った検索をお勧めしています。簡単な検索方法なら、その場でお教えしますが、詳細な検索は講習会を受講していただくと良いでしょう。

Q 講習会はどうすれば受けることができますか？

A 医学部分館で主催して行う初心者向け講習会は次のとおりです。

講習会名	講習場所	受講者	条件
定期講習会	医学部分館	だれでも可	毎月15日（前後）14時から 事前申込みが必要
いつでも講習会	医学部分館	医学部学生 教職員	事前申込み・2人以上で開催する 開催日、時間を打ち合わせる
おでかけ図書館	講座等	医学部 教職員	事前申込み・コンピュータを受講者が用意すること

Q 講習会はどんな内容で、どの位の時間がかかりますか？

A 初心者向け講習会の場合、「PubMed」「医学中央雑誌」の検索方法と、「OPAC」「電子ジャーナル」での文献入手方法、学外への入手依頼方法などで1時間を予定しています。

Q 私は医学部でない学部の学生です。私も講習会を受けられますか？

A 原則として所属される分館等で受講していただきますが、医学部分館で定期講習会を受講することも可能です。学外者（一般市民）も同様です。事前にご相談ください。

Q 自宅から検索や電子ジャーナルを見ることができますか？

A PubMed と OPAC を除き、ほとんどの検索や電子ジャーナルは学内からしか利用できないようになっています。

Q Web で文献を依頼できるようですが、IDとパスワードを教えてください。

A 電話で医学部分館（5126）までご連絡ください。なお、校費の依頼は教室名のIDからしかできませんので、講座等の担当者にお聞きください。学部学生は Web からの申込みはできません。

Q 必要な文献は、医学部分館へ頼めば全てコピーしてくれますか？

A よく間違える方がいますが、医学部内や附属図書館で入手できるものは、全てご自身でコピーしていただいています。電子ジャーナルも同様です。他学部所蔵雑誌や、他大学所蔵雑誌などの文献複写のみ、医学部分館で行っています。

分館
だより

学生用図書購入費と貸出統計の現況

工学部分館

「花信」第1号(平成9年2月発行)に、工学部分館の現況として昭和59年3月と平成8年3月におけるいくつかの統計数字が掲載されています。その中で蔵書数を利用対象学生数で除した学生1人当たり図書数が、53.2冊と50.0冊であることが書かれています。これと同じ数字を平成14年3月現在で算出しますと55.6冊ですが、蔵書数の中には研究用図書(研究室備付)や製本雑誌数を含んでいますので、これらの数字から学生1人当たり図書数をどうとらえるかは判断を要するところです。

昭和58年度当時工学部分館では学生が授業・学習に参考とする学習参考図書購入に附属図書館経由で配分される事項指定・学生用図書購入費のみを充て、学部予算では外国雑誌・国内雑誌・新聞・レファレンスブック・教養図書・語学図書等を購入するという予算立てでした。平成7年度から学部予算の中にも学生が授業・学習に参考とする学習参考図書の購入費が予算化され、平成12年度には学部予算・学習参考図書購入費は前年度の倍額、平成13年度にはさらにその倍額が措置されました。これは工学部が学習環境のより一層の整備を目指して、学部2、3年生の学生数に応じた授業料の1%を目処に図書購入費の充実を意図した結果です。

独立行政法人化後における附属図書館の中期計画の中では、「教育及び学習に必要な資料・情報を提供できる体制の整備に関する措置」として「学生1人当たり年1冊以上の基本図書等を整備する」ことを最初に掲げています。学生1人当たり1冊の年間購入冊数を目指すとして、平成13年度の実績(=利用対象学生数×購入図書平均単価)からみると、平均単価の見積り方によって増減が出ますので一概には言えないと思いますが、約11,000,000円必要となります。附属図書館と学部の連携のもとに予算増額の年次計画と配分計画の見直しによって、年間購入冊数を学生1人当たり1冊に向け、より近い実績を目指してゆくことが当面の課題です。

学生が授業・学習に参考とする学習参考図書の新しい図書の購入が進んだことにより、貸出冊数も増えています。平成13年度の実績では平成7～11年度の平均貸出冊数を約2,800冊上回っています。平成14年度12月現在では平成13年度の実績にあと1,000冊ですので同じ水準が期待できます。貸出延べ人数が利用対象学生の何%によって構成されているか確認できませんが、まだ図書館に来ない学生もあるのではないかと考えさせられることもあります。書架上の図書の更新が目立つようになればさらに利用が増えることが予想できますので、新旧図書の再配置を行って館内資料を探しやすく、見やすくなるように整備することも課題の一つとなっています。

図書の内容からみた耐用年数や利用の回転率をどう見込むか等によって、年間の購入予算レベルの算定も違ってくるでしょうし、新しい図書のみが貸出されるとは限りません。〈良い〉図書館にするためには快適な環境整備と適切な利用指導と利用者の学習への熱意・意欲とが必要です。

	平成12年度	平成13年度	備 考
図書館内備付図書購入冊数	1,359冊	1,922冊	製本雑誌を除く
学生一人当たり購入冊数	0.61冊	0.86冊	
学 生 貸 出 冊 数	9,693冊(注)	12,488冊	(注)平成7～11年度の平均数
貸 出 学 生 延 人 数	5,306人(注)	6,639人	

お知らせ

各館の選出による「企画図書展」がスタートしました

「企画図書展」……???

ことばを解釈するなら「企画を立てて図書を展示する」という意味ですが、図書館において本は読むもの、調べるもの。並べて飾っておく意味は何でしょう？

目的は、『信大にある6つの図書館の特徴を知って、この図書館ネットワークを目的に応じて使いこなしてもらおうこと』です。特に全学部の学生が旭キャンパスにいる1年生に、本と図書館を使うことに興味をもってもらい、これから自分が行く学部への関心を高め、それ以外の学部のことも知ってもらいたいのです。

信州大学は昭和20年代からタコ足大学として全国的に有名でした。新制大学の多くは第2次世界大戦後に旧制高校や師範学校を集めて作られたので、キャンパスが分散しているのは当たり前のことでした。その後、各大学でキャンパスの移転・統合が進むのですが、まだ分散状態が多かった頃でも信大の「とっても長いタコの足」は有名だったのです。信大の各キャンパスは、地域に溶け込み、暖かく見守られながら、その街の顔の一つとして50年を過ごしてきました。しかし、一方では「他の学部との交流が少ない。施設・資源の重複が多い、規模が小さくて効率的な共同利用ができない。」などの問題もあります。クラブ活動で行き来をしている人を除けば、旭キャンパスと自分の学部しか知らない、という人が多いのではないのでしょうか。

図書館でも同様に、「同じ本を各館で買っている。もったいない。」「OPAC（オンライン目録）で検索して、あった！」と思っても他の学部の分館……」という不満があります。それを解消し、信大全体の知的財産を有効に使うために、図書館は『ネットワーク型図書館の構築』を改革の方針としました。各館がそれぞれの専門性を伸ばして高度な情報提供の力を持ち、図書館の間にスムーズな情報の流れを作って、信大全体、また地域社会が求める情報を的確・迅速に提供する、そういう図書館をめざしているのです。そのための手段の一つに電子ジャーナルの大規模な導入があります。物体としての雑誌に固定されない、どこのキャンパス・研究室からも使える電子ジャーナルは、分散型大学の信大にとって強力な武器です。

それと同時に、「やっぱり、本は手に取ってみなくては」、これも真実です。この気持ちにこたえ、じっくりと本と取り組む環境を作るために、図書館は参考図書や学生用の図書の充実に努力しています。『企画図書展』は、その一環として計画されました。専門の図書館を背負って立つ図書館員が、様々な切り口で本を選び、組み合わせて、ちょっとした案内板を立てて皆様の前に紹介します。迷路をたどりながら、次々に見えてくる新しい景色を楽しむ、そんな気持ちよさを提供できると確信しています。



2003年1月～2月は、中央館による「Enjoy 信州大学」をテーマに展示しました。今年度開いた「所蔵絵画展」にちなんで美術関係の図書、山岳関係の入門書、信州の自然や民俗など、学生生活を彩る本を紹介しました。人気投票では「なんでも食べるゾ 信州人」が一番人気でした。

2月中旬からは、教育学部の「きょういく？ 明日いく？ 教育展！」を展示しています。

(展示が終わった図書は貸出ができます。ゆっくり読んでください。)

本学関係者著作寄贈図書を紹介

(平成14年9月～平成14年12月)

ご寄贈くださいました皆様にお礼申し上げます。内容紹介は寄贈者からいただいたものです。

書名	幕末期日本における西洋砲術家の洋学知識 —— 高知市民図書館蔵「徳弘家資料」所収「書籍写本等史料」の分析		
発行者	信州大学	出版年	2002
寄贈者	坂本保富	所属	教育システム研究開発センター
<p>本書は、幕末期日本における「東洋道徳・西洋芸術」思想の実践的展開としての西洋科学文明の普及拡大現象を解明する洋学教育史研究の一環として、幕末期土佐藩の西洋砲術師範を勤めた徳弘父子が遺した膨大な史料「徳弘家資料」の内の、西洋軍事科学に関するオランダ語関係の書籍・写本・翻訳草稿などで構成されている「書籍写本等史料」を逐条的に解読分析して、その内容と特徴を闡明した研究報告書(四百字詰原稿用紙で四百枚、科研費研究成果の一部)である。高島門下に連なる徳弘父子は、土佐藩内で坂本龍馬など五百名を超える門人たちに、最新の西洋砲術に関連する西洋諸科学を教授したが、本研究によって、その内容とレベルとが解明された。</p>			

書名	宇宙を探る新しい目：重力波 / 古在由秀 編		
発行者	クバプロ	出版年	2002
寄贈者	木舟正	所属	工学部
<p>可視光に加えて、電波、X線、赤外線やガンマ線など、電磁波のあらゆる波長帯、さらにはニュートリノなど、「新しい目」による宇宙探求の最先端に重力波がある。エネルギー・質量が時空間の歪みを作りその変動が重力波となって宇宙から飛来することはアインシュタインの一般相対論の必然的帰結である。技術的には極めて挑戦的な課題であった重力波検出の夢がようやく最近になって、かないそうになってきた。</p> <p>世界の開発研究をリードしている日本の重力波グループが重力波とその検出方法を分かり易く解説するため開催した第16回「大学と科学」公開シンポジウムでの講演を集録したのが本書「宇宙を探る新しい目」である。</p>			

書名	GSSI Sports Science Network Forum Nagano, 2000 (Exercise, nutrition, and environmental stress ; v.2) / 能勢博・Lawrence L. Spriet・今泉和彦 編		
発行者	Cooper Publishing Group	出版年	2002
寄贈者	能勢博	所属	医学部
<p>2000年10月、穂高町で私たちの教室が主催したフォーラム、「GSSI-Sports Science Network Forum in Nagano 2000」の論文集である。その開催経緯は、1997年10月、我々の教室が中心となって、松本で開催した「'98長野冬季五輪記念・国際スポーツ医科学シンポジウム」に端を発している。この回が非常に好評だったため、今度は若手を中心とした3回シリーズの国際フォーラムを開催した。本書はその2回目の論文集である。フォーラムの全参加者は140名、大学関係者の他、企業研究所、トレーナー、管理栄養士の方々の参加を得、また本学からは、森本尚武学長、小宮山淳医学部長、千葉茂俊前学部長、小林茂昭脳外科教授にも参加していただいた。スポーツ医科学という新しい学問分野の魅力を感じ取っていただければありがたい。</p>			

書名	アントナン・アルトーと精神分裂病：存在のブラックホールに向かって		
発行者	関西学院大学出版会	出版年	1999
寄贈者	森島章仁	所属	医学部
<p>アントナン・アルトーは、「思考の腐蝕」という事態を詳細に記述し、「残酷の演劇」を提唱した20世紀における最も重要な作家の一人である。これまで文学・演劇・思想などの領域から語られてきたアルトーを精神医学面から照らし出した本書は、アルトーのデッサンを手がかりとして、諸作品と生、ひいてはその異質な存在に焦点を当てる。空虚とも過剰とも形容される、存在の無限性をたたえたブラックホールに向かっていくアルトーの道程は、全き自由へと至る存在の改変を問いつける苦しげな旅であった。自由であることの根拠とは何なのか——アルトー論であり、精神分裂病論である本書は、自由の経験の極点に踏み込んでゆきながら、それを問う。</p>			

上記以外の本学関係者著作寄贈図書一覧

館名	書名	発行者	出版年	寄贈者	所属
中央館	水素同位体比から見た水と岩石・鉱物	共立出版	2002	黒田吉益	名誉教授
	構築主義とは何か	勁草書房	2001	赤川学	人文学部
	東アジアの性を考える	京都精華大学	2001	赤川学	人文学部
	セクシュアリティの歴史社会学	勁草書房	1999	赤川学	人文学部
教育学部分館	多文化共生のコミュニケーション：日本語教育の現場から	アルク	2002	徳井厚子	教育学部
	田奇詩集	朋友書店	2000	前川幸雄	教育学部
	中世後期イタリアの商業と都市	知泉書院	2002	齊藤寛海	教育学部
	国語科指導と評価の探究	溪水社	2002	益地憲一	教育学部
医学部分館	Radioautographology general and special (Progress in histochemistry and cytochemistry ; v.37, no. 2)	Urban & Fischer	2002	永田哲士	名誉教授

人事異動

12号掲載の次の人事異動について、日付等が違っておりました。訂正してお詫びします。

日付	区分	新官職名等	氏名	旧官職名等
14・3・30	辞職		根市祐美子	農学情報係事務補佐員
			天満哲司	繊維学情報係事務補佐員(時間外担当)
			浜崎暢央	繊維学情報係事務補佐員(時間外担当)
			中村毅彦	繊維学情報係事務補佐員(時間外担当)
14・3・31	退職		峰村武	教育学情報係長
	辞職		逢澤潤一	医学情報係事務補佐員(時間外担当)
			林昭孝	医療短期大学部事務補佐員(時間外担当)
			高杉優貴	医療短期大学部事務補佐員(時間外担当)

「所蔵絵画展」を開催

附属図書館中央館では、平成14年10月29日(火)～11月4日(月)の間、図書館特別資料室において『信州大学附属図書館所蔵絵画展 ― 脂派から紫派へー』を開催しました。

附属図書館中央館では、旧制松本高等学校時代に収集した絵画を中心とするコレクションを所蔵しています。この中には日本洋画界のリーダーであった藤島武二、満谷国四郎ほかの画家の作品が含まれており、大正時代、旧制松本高等学校長が「学生の情操教育のために」と購入したものと伝えられています。今回はこの中から「紫派」と呼ばれた白馬会系の作品と、「脂派」と呼ばれた太平洋画会系の作品計15点を公開しました。

わずか1週間の開催でしたが、長野県内外から多数の観覧者を数え、「このようなコレクションの存在を初めて知った」「今後もぜひ公開してほしい」等の多数のご意見・ご要望をいただきました。

今回の企画に全面的にご協力くださいました信州大学教育学部岡田助教授をはじめ、関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。(表は出品作家と展示作品)



長原孝太郎 「花瓶と花」	和田 英作 「スイトピー」1920年	白滝幾之助 「バ ラ」
岡田三郎助 「信濃の春」1922年	高木 背水 「五月雨の朝」	満谷国四郎 「晩秋、野尻湖畔」1923年
矢崎千代二 「カルカッタ郊外の村落」 「印度教徒の沐浴場」	辻 永 「風 景」	石川 寅治 「春雨の潮来」
	藤島 武二 「ローマの風景」1907年	南 薫造 「雨」
中沢 弘光 「伊豆山の風景」1921年	小林 万吾 「山 辺」	柚木 久太 「雪の諏訪湖の景」

行 事 等

- 平成14年 10月8日 人文・経済・理学部委員懇談会(附属図書館館長室)
 10月28日 学術情報・図書館委員会(平成14年度第3回 SUNS 使用)
 10月29日～11月4日 信州大学附属図書館所蔵絵画展(信州大学附属図書館特別資料室)
 11月11日 附属図書館運営専門部会(附属図書館会議室)
 12月16日 学術情報・図書館委員会(平成14年度第4回 SUNS 使用)
- 平成15年 1月21日 電子ジャーナル利用説明会(中央館) 2回開催
 1月24日 電子ジャーナル利用説明会(教育学部) 2回開催
 1月27日 電子ジャーナル利用説明会(医学部) 2回開催
 1月29日 電子ジャーナル利用説明会(農学部)
 1月31日 小谷コレクション(山岳関係図書)の寄贈受入れ記者発表(中央館会議室)
 2月5日 電子ジャーナル利用説明会(工学部)
 2月14日 電子ジャーナル利用説明会(繊維学部) 2回開催
 1～2月 第1回企画図書展「Enjoy 信州大学」(中央館企画)

花 信 第13号 2003年3月31日 [年2回発行]

- 編 集 花信編集委員会(長友良維・金井忠彦・波止教史・岩波峰子・鈴木史子)
- 発 行 信州大学附属図書館
 〒390-8621 松本市旭3-1-1
 TEL 0263(37)2174・FAX 0263(33)5833
 URL: <http://www-lib.shinshu-u.ac.jp/>
 E-mail: jjja0141@gipac.shinshu-u.ac.jp